

樹神信仰の系譜

—— 釈尊の風土・精神的基盤 ——

高 橋 堯 昭

インドに生れた人間釈尊がいつしか礼拝の対象、救済者とか、久遠本仏・超越者になって行つた。資料的にアシカ¹の詔勅に過去仏カナカムニ²が現れるように仏陀の永恆性が現れ、又サンチーの大塔建立には非常に多くの僧の寄付名³が残っているのは、仏弟子舍利弗や目連の如きエリートならいざ知らず、仏教が広まって来て、多くの僧が入門して来ると、「悟らんとして努力すればする程、悟りより遠き有限な自⁴」の自覚から釈尊の悟りにあやかろうとする。いわば、聖者の仏教から凡僧の仏教に変わって行く時、「祈り」の傾向が出て来るといえよう。こうなると釈尊は益々大きな存在となつて行く。

然し一方、私は他面、釈尊が生れ、且つ、生涯を送られたインドの自然的風土やそこから生じた精神的環境からも、この超越化が考えられてもいいのではないかと考へる。



インドは暑い、北部ヒマラヤ山麓では四季らしいものがあるが、中南部に至つては、灼熱の太陽の照りつける常夏



(1) 樹に祈る

の地帯である。従って人々の生活は、勢い樹の陰、特に大樹の下が人々の生活の場となる。農家も樹の陰に作られ、動物もここで飼われ、人々の集会もこの大樹の根本で行われる。現代でも町といわず村落で、アイスクリーム屋が店を開き、庶民の足の自転車のパンク直しも樹の下である。それも日陰から日陰へと移動して商売している。特に日を決めて開かれる八日市とか三日市とかの「市」も大樹の根元を中心にぐるりとまわって店々がつけられているのをよく見る。かくの如く、インド人の生活は、樹とは切っても切れぬ関係をもっている。

特に暑い五、六月など、部落の会合、寄り合いなど暑い昼をさけて、夜お燈明（素焼きの皿に燈芯をさげた簡単なもの）で長々と論議をしている。「貧者の一燈」の話や、日本の仏教習慣の「お通夜」「おたい夜」というものも、こうしたインドの民衆の生活を反映していると思われる。従って、デリー、カルカッタ、ボンベイ等の大都市はもとより、小さな町でも村でも、大樹の下こそ彼等の生活の場であり、語らいの場であり、憩いの場であるといえよう。

特に私が初めてインドに行った頃には、人々が大きな樹の幹に寄り添い、頭をこすりつけているのを見て、瞬間、樹の下で小用を足しているのかと思った。然し、それは、樹の幹に頭をこすりつけて祈っているのだった。（写真(1)参照）何故なら、根元には小さな祠が作られ、これにヒンズー教特有の聖なる赤い粉が吹きかけられていて、根元の一部は真っ赤である。この赤い色に変わった所は、たとえ祠があろうが、なかりうが、そこには神が祀られている所、否、むしろ、その樹自体が神と信ぜられている。その証拠にそこにはプジャー（お供えもの）がしてある。そしてこれが発達して来ると、根元には欄楯、即ち木の柵や石垣で周りを囲ったり、又、建物までが出来て来る。

これが聖樹信仰、樹神信仰である。大地から聳り立つ巨木の中に、樹の生命力を感じ、それにあやかろうとする宗



(2) 劫樹 カルカッタ博物館

教心理である。その代表的なのがカル
カタ博物館入口にある「劫樹」（写
真(2)参照）といわれる石の大きな彫刻
である。たわわな枝から財布（当時は
銭袋）がぶら下ったり、又、小麦や雑
穀が袋や籠に入れられて釣下げられて
いる。その他大きな枝に花咲き、リス
や鳥が中で戯れているという彫刻も多
く出土している。樹こそ生命の源であ
るという考え方の表現である。



この樹神信仰は、遠くインダス文明
にまで遡る。インダス文明のシールに
「根元を欄楯で囲った菩提樹」という
図柄のもの、又、「二つに分かれた木
の幹の間に神が立っている」（写真(3)

樹神信仰の系譜（高橋）



(3) 枝の間に立つ樹神（インダス文明）



(4) ヤクシーと蓮華（樹）との一体図 マトウーラ博物館



(5) サンチー仏塔 夜叉から植物が
樹神信仰の系譜(高橋)

参照) ものや、「虎を見下ろすように大きな木の枝に腰掛けている女神」等の如く、インドの樹神信仰は遠くインダス文明にまで遡ることが判る。

更に樹神、大樹に宿る樹の精の信仰は、それに止まらず、大樹を大樹たらしめる大地の生命力への信仰に発展して来て、「樹の神、即大地の神」という構図が出来て来る。

然し、人間は不思議な生き物で、こうしたものを人間の姿で表現しないと満足出来ない傾向をもっている。表面は美しい女神像だが、裏面は蓮華というユニークな像が出現する(写真(4)参照) 蓮華はインドでは植物全体を象徴するから植物(樹)と人間が合一することを示している。こうした彫刻の中には、「太鼓腹の人物の下半身が植物である」ものもあつたりする。その最たるものがサンチー仏塔の欄楯に彫られた数々の彫刻である。円型図柄の最下部に太鼓腹の人物、その人の臍か



(6) サンチー大塔 トラーナ彫刻

ら、恰もマハバーラタの「永遠な存在が宇宙の新たな創造に精神を集中すると、ロータスが臍から現れる」(写真(5)参照)のように蓮の蔓が繁茂し、それから葉や花、そして蕾が咲いている。或いは口から蓮が繁茂成長したり、又、花や蕾を繁茂する長い蔓を女の人が両手で持っている彫刻等、こうした例は枚挙に遑がない。いわば大地の生命力をヤクシー(夜叉女)とし、その体から植物が繁茂するという図柄である。その像はヤクシーの女性像が多いが、ヤクシャ(男性夜叉)も皆無ではない。インド各地の博物館に、いかつい、たくましい男性像の夜叉像があるが、これらの像の両足の間には木の芽が萌え出ている⁽⁵⁾。即ち、これらによって、夜叉は男も女も、共に大地の生命力の表現であることが判る。その「いかつい姿」の最たるものは、サンチー仏塔のトラーナの彫刻である。トラーナ(日本では鳥居となる。但し、インドでは三層)その最下段の梁に彫られた像は、両側の巨大な姿をした夜叉の口からすると蔓が伸び、その蔓から花が咲き、たわわな実がなっている。そして又彫刻面に散在的に描かれた他の四人(一部缺けているから、さぞかし五人であったろう)の夜叉の口からも花を咲かせ、実をならした蔓を吹き出している。(写真(6)参照)まさに、大地の生命力がこの夜叉によって示されて



(7) パールフット 樹をだくヤクシー

いる。

かくて、パールフット・サンチ・マトウーラの仏塔の周りに沢山の豊満なヤクシーの像が彫られて来る。特にヤクシーの中で一番美しいとされる、サンチ東門の「樹下のヤクシー」⁽³⁾が大切な東の方角を守ることになる。その他のパールフットやサンチー、そしてマトウーラで枝を抱いたり、枝に手を掛けたりする像（写真(7)参照）が無数に、然も、仏塔を守る守護神として仏塔の周りの欄楯の周りに、ずらりと彫られている。現代的感覚から言えば、このようなコケティッシュというより肉感的な像が果して守護神として役立つだろうかとの感もあるが、古代の樹神信仰、そしてその基本たる大地の生命力の発現として考えられたからである。

特に木も枝もないヤクシーの場合でも、像の上に円型蓮花模様があったりして木との関係を示しているし、又全然木のない場合でも、豊満な女性が立ち、頭上の男女がヤクシーの持つ壺の水（生命の水）を取ろうとしている。大地の生命力たるヤクシーにあやかっ、人々が楽しい生活が出来るということを示している。然してよく注意して見るとこのヤクシーの右手には小さいながら木の枝や実が握られている⁽⁷⁾。やはり樹神信仰そのものを示しているといえよう。然して男性夜叉より、女性像の方が断然多いのは、女性は子を生み育てることから豊満な女性像が豊穰を現していると言えよう。



この大地の生命力は人間の姿のヤクシャ・ヤクシーでばかり示されているのではなく、実に多くの形のもので表わされている。マカラといって頭は象、しっぽは魚という空想の動物で表わされているものもある。サンチー仏塔の門

柱に、頭は象、しっぽは魚或いは蛇といった動物の口から、すると蔓が伸び、そしてそれから花が咲き、葉や蕾を無数につけているのが見出される。或いは口は鰐で胴体は動物というものの口から花や葉が萌え出ているのもある。要するに、大地の力強さ、生産力を示す為、人間の姿では、あくまで胸や腰部を、又不可思議な動物では、ことさらにその「みにくさ」を誇張し、その力強さ、たくましさ強調したのであろう。

ここまで解説して来ると、前述の夜叉の口から蔓がするすると出たり、又マカラ等の空想の動物から、花や実をつける等の例だけではなく、博物館の出土品や遺跡の彫刻の中にある、「壺から沢山の蓮の蔓や花の蕾の繁茂」している彫刻等もマカラ等の水棲動物の口から植物が出ているのと同じである。

筆者の数多きインド訪問で体験し、常に不思議に思ってきたのは、インドの土質である。「乾けばカチカチ」になる。いわば日本の農家の土間「タタキ」の如く堅くなって耕運機でもなければ到底人力では耕せない。牛にひかせて耕すのも容易ではない。然も雨に濡れるとタラリとどろどろになって田植えや種まきに最適となる。だからこそ、カリーダーサの詩のようにモンスーンの到来を首を長くして待つのだと思う。従って、大地に活力を付けるのはこの水に外ならない。最近のインドでは所としてイリゲーシヨンの運河が恰も血管の如くはりめぐらされてきたが、以前はあんなに暑くても「一毛作」しか出来なかった。水さえあれば三毛作まで可能になっている事実からも、「大地の生命力」をつけるものは「水」と考えたのは当然のことであらう。

リグベータに「空に先立ち、地球に先立ち、水が最初に保たれ、すべての胚芽がその中に存在する」(R.V.X.82~5) (Y.V.N.9-2)とあり、バカバッターキーターに「はじめに世界は水であった。私(神)は水の中の生命の本質で、あらゆる植物を育む(VI-8, XV-13)」と、又Satapatha Brahmana「あらゆる存在の本質は大地であり、大地の本

質は水である」と、(VI48)、又、アグニプラーナには「ロータスは水を表わし、大地はその花である。ロータスの葉が水を覆うが如く、大地は水の上を覆う」(XIX12)と水の力を強調している。仏塔のまわりに「壺」(写真8参照)の彫刻が多数彫られている理由「もこの水」の重視からと理解される。ジャータカ四七九に「大菩提樹やストゥーパを建てる時には、『水をみたした金銀の壺』が置かれるべきである」というのも、ここから理解されよう。

こうなってくると、あの天まで届く大樹、そして大樹を人格化したあの豊満な美しいヤクシー、戒いは数は少ないながら男性夜叉ヤクシャは、大地から生まれるもの。しかもその大地は「水によってすべてを生成させる」生命力を得る。従って大地から生まれたヤクシー、コケティッシュな豊満な女性像ながら強力な力を持つものとなる。特にかつてはラクノー博物館にあって現在デリー博物館にある「水精女（9）の像は壺から水が湧き出し、その上にヤ



(8) パールフット 壺(水)から植物

クシーが立ち、裏はロータスの茎や花である。かくて先述の町かどで木の幹に頭をこすりつけていたり、又木の根元に赤い粉をふりかけ供物を捧げているインドの民衆を見るに付け、「樹(夜叉) 〓大地〓水」という図式が理解され、この三者は一体となることが分かる。これがインド文化の基本構造と言えよう。



しかして大樹は即ち樹神はどのような方法で祀られたのだろうか。ジャータカ三〇五(以後J・〇〇〇とする)に、「樹の根元を平かにし、草を抜き、まわりに垣を結び、砂をまいて掃き清め、五指量の香を供養し、花環香薫香を供養し、灯火を点じて樹のまわりを右繞」とか、J五三七に「樹神に願望成就を感謝して、村を建設させ、多くの家族を住ませた。村は大きくなって、八万ばかりの商店が軒を並べた。根元の枝の広がる限りの土地は平にして、その周囲の欄楯を作り、門や扉をつけた。その村は鬼が調伏されたことから、カンマーサタンマ町という名が生じた」とあるから、大樹で象徴される樹神を中心に当時の市民生活がなされていたことがわかる。

しかして、この樹神とされる樹は一体どんな樹であつたらうか。ジャータカから見ると(一)ニグローダ(二)菩提樹(三)沙羅樹(四)蔑麻樹(五)ルチャ樹(六)パラサ樹(七)綿樹(八)庵羅樹(九)多羅樹(十)鎮頭迦樹(十一)粧婆樹(十二)樹神、とあつて名が固定されないもの等があるが、さぞかし、これらは孔雀王呪經卷上に「二百近い別々の夜叉(樹神)がそれぞれ町の守護神として信仰されていた」とあつたり、サンチー大塔のトラナーに、七本の樹や四本の樹と三基のストウーパで過去七仏(1)を示す彫刻があるが、そのそれぞれの樹は実に綿密に「枝や葉の特徴」がとらえられている。これは明らかに前述經典の如くそれぞれの種族・部族でトーテム樹としてそれぞれ

独自の樹が祀られていた為であろう。



こうした社会状況の中で釈尊は誕生された。特に仏伝にあるように、母君マヤ夫人がルンビニで大樹の枝を持つと、釈尊が生まれた。¹²又五十日の所謂お宮参りの時、樹神に詣でられると、樹神の方がひざまずき、「あなたこそ樹神中の樹神¹³」と礼拝した。いよいよ出家を決意して宮殿を出るとき、愛馬カンタカの「蹄」の首で警護の人が目を覚まして出城を妨げることがあってはと、夜叉（樹神）が現れて馬の足を支えた¹⁴とある。いよいよ悟りに近づき、菩提樹下に近づくと、樹神が現れ、自らの樹の下に草を敷いて招じ入れそして又いよいよ悟りに入るとき、マールが誘惑し悟りを妨げたとき、樹神が大地震を起こしてマールを退散させた¹⁵等経典や彫刻が随所に出土している。

然も成道以来釈尊は樹の下から樹の下にはた又岩の洞に宿って遊行を重ねられた。「アーナンダよ、ヴェーサリーは楽しい、ウデーナ（Udena）霊樹はたのしい。サッタンバカ（Sattambaka）霊樹は楽しい。バフパッタ（Bahuputta）霊樹は楽しい。サーランダ霊樹・・・」¹⁶との文章は釈尊と樹との関係を如実に示している。これらの聖樹は「三〇五や四七九の如く「柵（欄楯）が設けられ、その中は掃き清められ、」とあるように、そこがチャイトヤとして信仰されていたのであろう。中村元氏は「建物が建っていたわけではない。樹の周りが聖なる神域というべきである」と述べておられるが、欄楯も神域もなくとも、釈尊が、そこに座すると「何ものか大いなるものに包まれる心の安らぎ」を得たに違いない。それだからこそ「〇〇樹はたのしい」という表現になったことであらう。従って生涯樹下から樹下に、そして岩窟に遊行され、最後はクシナガラ¹⁷のサラ樹の下で入滅されたのだと思つ。



こうした釈尊の樹や洞窟とのかかわりを示す二、三の仏典から釈尊の止宿されたところを見ると、

1、大般涅槃經

(1) ガヤー

(2) ラージジャグリハ

タンキタ石床に於けるステイローマという神靈(夜叉)の住居

パニヤンの樹木の園。シートー林のサツパソソディカの洞窟、ターポダー園、ヴェーヴァーナ(竹林)のカランダーカーニヴァーバ、ジバーカのマングー林、マハヴァーナ(大森)の二階建講堂、アジャパーラ、ニグローダ園、ムチャリンダ樹、ラージヤタナ樹、ラツティーの林園のスパティータ廟、カクダ樹に住心神がここにつかまって下さいと枝を差し出す。ネーランジャ川のほとりの菩提樹の根元。

(3) ヴェサーサー

(4) ナーランダ

(5) パーヴァー村

(6) クシナーラ

(7) その他の地

アンババーリのマングー園、チャパーラ靈樹、ウデーナ靈樹、ゴータマカ靈樹、サーランダダ靈樹
鍛冶工チュンダのマングー園
カエが生まれた所のサーラ樹の一对の樹の間

(イ) 舍衛城ジエータ林(ロ) コーサラ国スンダリカー河の岸(樹の根元で頭まで衣をかぶって)(ハ) 園林の靈城で恐ろしく身の毛もよだつ所に床を設けて(ニ) ルンビニー楽園チャトラタのような心楽しい森の奥地ルンビニー

2、スパーニータ¹⁹では

(1) 或るとき尊き師はアラヴィー國のアーラヴァーカという神靈(夜叉)の住居に住み給うた。

(2) 或るときガヤー村のタンキタ石床に於けるステイローマトイウ神靈(夜叉)の住居に居られた。

(3) アーラヴィーに於けるアッガラーヴァ靈樹のもとに居られた。

(4) 半月の十四、五及び八の夜に園林の靈城、森の靈城、樹下。

3、ブッタチャリタ⁽²⁾

- (1) 夜叉カピラの名にちなんで呼ばれるこの都。
- (2) (釈尊の来訪が)クベーラの遊園すらも美しくすることが出来る。
- (3) (釈尊の来訪は)財宝の神クベーラの息子に天女の群れが侍るが如く。
- (4) (出家出城に夜叉が)蓮華のような手を(馬の蹄を)持ち上げた。
- (5) (釈尊の言葉や音を聞くと)財宝の主クベーラの眷属たちは悦んだ。
- (6) 天上の(財宝の神)クベーラの王と地上の王の栄華の両者を同時に享受。

等の経文の文字から釈尊が樹下から樹下、そして洞窟へと、樹神地神(夜叉)のチャイトヤに遊行し、又、その夜叉の大將クベーラとの深いかわりを読み取れる。



こうした風土的精神環境なるが故に樹下で入滅後釈尊は、樹神信仰のあり方そのままにストゥーパで供養された。言い換えると、釈尊のストゥーパは樹神を祀った、その祀り方で建てられ供養された。即ち四七九迦陵識王菩提樹供養本生に「諸仏の勝座、大地の躋たる大菩提座を認め、王のカーリサばかりの広さを限って、兎の髪ほどの草も生えておらず、銀の板のように真白く輝く砂が一面に敷かれてあった。然もその周囲一面に雑草や蘆草や森に生える大樹など生い茂って、恰も菩提座を右繞するような形をし、且つまた菩提座の方向を向いていた」とある。これは又、J・五〇四・四七九・五三七の記述によっても、その構造や右繞等、又礼拝形式も似ていることから、樹神信仰に根ざしていたことがわかる。但し違ふところは仏教は供物として動物の犠牲は否定するのを原則としていたが、J・四

五九「水本生」の如く、地主の口を借りて「動物の犠牲はお前たちの習慣に従ってよい」といわざるを得ぬ程當時は動物の犠牲が行われていた。否むしろ仏教の方が特異な存在であったと言えよう。

かくてストゥーパの作り方が樹神のチャイトヤの作り方似て来ると、釈尊と樹神とが一つのものである。否むしろ、多くの樹々がそれぞれの部族でトーム樹、部族の木として信仰されて来たように釈尊もそれぞれの樹の神、樹の精として考えられるようになった。ジャータカでは前述の十二種類の樹の名があげられ、「かつて樹神であった時」という話が三十一話も出ている。これは、樹神信仰の伝統のあった当時のインドの民衆に取っては釈尊も、樹神と同じように考えられていったことを表わしている。この「樹神即仏陀」という典型的な話が南伝大蔵経因縁物語のスジャータの話である。即ち「ウルベーラのセーナニの資産者セーナニの娘スジャータは、下女が釈尊を見て、樹神と見違つて知らせたので、仏陀なる樹神を供養した」とあるように、仏陀と樹神との区別がなくなった。

特に仏陀が苦行を止めてニレンジ川で体を清め岸に上ろうとしたが体力がなくて登れない、すると「樹神は手を出して釈尊をひきあげた」(Vogel Indian Serpent Lore, PL XII a) と *rahitavistra* (XVII) にも同様な話があるのは釈尊と樹神の親近性を示している。更に J・四九三に「舍衛城の商人達が商売にでかける時、仏に多くの布施をして帰依と戒めを守ることを約し、『大徳若し無病息災に帰ったら、世尊の御足を礼拝します』と出かけ、旅行中に一樹神に……水や飲物……を恵まれた上、財宝を得て無事に帰つて来ると、香や花環を手に尊者を敬って大布施をし、『その功德を財宝を与えてくれた樹神に回向した』とある。これは J・一九と同じく釈尊が樹神夜叉との親近性、乃至同一的なものに考えられて来たことを示しているといえよう。



(9) ミラクルオブ・スラバスティ

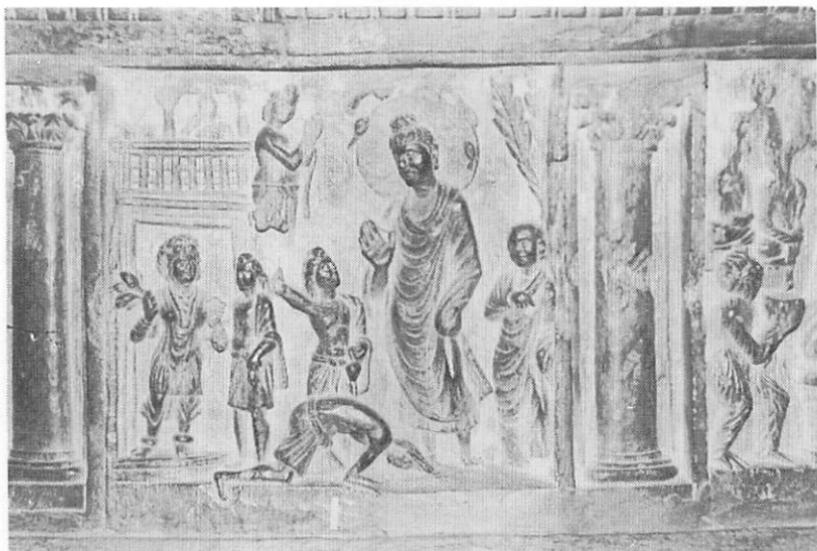
◇

ガンダーラで最も美しいとされる「ミラクル・オブ・ストラバステイ」という彫刻（写真(9)参照）の中心の仏陀は蓮華の台座に座し、その台座を支えるのは太い幹で、それが、大地から生えている。更にその蓮華の花の茎からは何本もの茎が出てその上に蓮華台あり、多数の仏陀が座している彫刻は無数にある。或いは舍利容器にアーカンサスの葉の上に舍利容器がのっている、恰も、「舍利容器は植物の実」の如き観を呈するものが多数出土している。舍利容器即ち釈尊の舍利は「大地から生えた植物、果実」の如きものとも言えるものも多数ある。はた又アジャンターには二人の女性に支えられた大地から突出した太い柱の如き幹から無数のツルが出、その夫々に花が咲き、その上に仏達が生きている彫刻がある。この典型的なものはチベットの聖樹マンガラである。一本の大樹の幹から分かれた無数の枝、その夫れ夫れに仏陀が座している。まさに大地の生命力の顕現が諸仏諸尊ということを示している。

こうなると仏陀は単なる人間釈尊ではなく、この大地の「生命力」の発現としての樹神的存在、超越的存在になってきたことが分かる。これはインドの樹神信仰の環境の中で生まれ且つ生涯を過ごされた釈尊にとつては自然の成り行きであった。即ち生身の釈尊からすぐ超越者救済者仏陀、久遠の本仏のようになって行くのはインド的精神風土からは必然の成り行きではなかつたらうか。



ラホール博物館内に復元されたシクリの仏塔。そのまわりに釈尊の生涯の彫刻がある。入口から正面に見えるディ



(10) シクリ仏塔の燃燈仏 ラホール博物館

パンカーラ(燃燈仏)の彫刻(写真(10)参照)は仏の永遠性を示す重要な仏である。釈尊の前身 Megha は野道で村の娘 Bhada 或いは Prakri から七茎の蓮華を買い、仏に向かって投げ上げると、その花は空中に止まった。更に Megha は道がぬかっていたので集められた鹿皮を敷いたが、少し足りない。そこで自らの髪の毛を敷いて仏を通した。その功德によって次の世に釈尊と生まれ変わり、悟りを得ることが出来たという話。これは人間釈尊の「生命の連続性」を示している。そして更にこの連続性が認められると、永久に続くという久遠性という考え方に落ち着く。従って「人間釈尊は久遠の仏の生れ変わり」という重要な思想を生むことになる。然して燃燈仏は、火の宗教⁽²⁵⁾という西アジア的要素を含みながら、猶インド的精神伝統を示していると思われる。即ち、Megha とは雲の意味、供養した蓮華も、泥まみれの道も「水」と縁が有り、更に少女の名 Bhada も Prakri も「豊富」を意味する。水によって豊かになる⁽²⁶⁾ということである。まさに今まで書いて来た

「水↓大地↓樹」というインドの樹神信仰を蔵している。こうした樹神信仰の伝統の下にある為、仏は生身の人間から大地の生命力の顕現たる樹神の如く、どんどん大きくなって超越者救済者になっていく。これと対応するかの如く、仏を表現する仏塔はサンチーの土饅頭式からマンキャラの如き同型ながら規模はとてつもなく大きくなり、塔の高さもどんどん高くなって法華經の高さ五百由旬、縦横二百五十由旬、の二倍の高さの塔になる。これも仏を超越的なものと考えられた結果であらう。こうした塔の巨大化、高層化と同様に、チャイトヤ^(註)といって塔(のちに仏像)を建物の中に安置するようになる。単なるお墓ならともかく、超越神救済者たる仏を雨露にさらすには忍びないとの心情からであらう。

かくて仏教が広く普及して聖者の仏教から凡夫の仏教になっていくうちに人間の有限性の自覚即ち「凡夫の自覚」から救済を求める心情が生れ、仏が段々超越化して来るといふ一面と同時に、仏陀はもともとインドという風土の中に生れ、その精神的伝統の中に生涯を過ごされた。そして積尊を慕う人々も深くこうした樹神信仰に影響を受けていた。為にこうした立場に立って積尊を考え慕った為、積尊もやがて樹神の如くどんどん巨大化して人間積尊から超越者積尊として考えられるようになって行った。数多くインドを旅するうち、この「有限性の自覚」といふ面から積尊が超越者救済者になって行くといふ一面を考えると同時に、インドの熱い風土の中の民衆の生活から来る樹神信仰という精神的風土から、もともと積尊を超人化する伝統又素地があったことが注目されねばならないと思う。

〔註〕

(1) ニガールリサガール出土 アシヨカピラー銘文(塚本氏アシヨカ王碑文より)

樹神信仰の系譜（高橋）

- (2) 西谷目録。サンチー第一塔（寄附者六七二名）中、比丘四七、比丘尼七〇、大徳六。
 第二塔（寄附者一〇五名）中、比丘一九、比丘尼二〇
 第三塔（寄附者 十五名）中、比丘三、比丘尼五
- (3) 根本説一切有部毘奈耶業事卷十二（大24—五五下）
- (4) マトウーラ博物館に数点所蔵展示されている。
- (5) ラクノー及びマトウーラ博物館に多数展示されている。
- (6) 山本智教氏インド美術史大観写真篇一一頁・12・59
- (7) 山本智教氏全書一八六頁・20—168
- (8) 森秀雄氏訳カリターターサ靈の使者
- (9) 山本智教氏前掲書一八五頁・20—157
- (10) 大正一九一四五〇上—四五二下
- (11) 山本智教氏前掲書一一〇頁・12—56, 57
- (12) 栗田氏 Gandhara Art. I. 写真二十一参照
- (13) Lalita Vistra chap. VIII
- (14) 方広大莊嚴經出家品（大3—五七五下）ほか七經に同様な表現
- (15) 栗田氏前掲書写真一四四—一五五参照
 方広大莊嚴經降魔品第二十一（大3—五九四下）等七經に同じような表現あり。
- (16) 中村元氏訳ゴータマ仏陀の生涯 九四頁（岩波文庫）
- (17) 中村元氏訳スッタニパータ（経書）三三〇頁（註）（岩波文庫）
- (18) 中村元氏 釈尊最後の旅（岩波文庫）より
- (19) 中村元氏 スッタニパータ（岩波文庫）・前掲ゴータマ仏陀の生涯参証
- (20) 大乘仏典 ブツダチャリタ（筑摩書房）

- | | | | | | |
|------|---|--|--|--|--|
| (21) | 南伝大藏經二十八卷一四七頁 | | | | |
| (22) | 栗田氏前掲書二卷写真七九〇・八〇一参照 | | | | |
| (23) | アジヤンター第七窟内 前室側壁 | | | | |
| (24) | チベットのマングラは大部分がこうなっている。特に筆者蔵の名品はこの点で名高い。 | | | | |
| (25) | 定方屢氏 印仏研19—1 九五頁 | | | | |
| (26) | Comanawamy YAKSA 四九頁註 | | | | |
| (27) | 山本智教氏前掲書一四二頁参照 | | | | |
| (28) | 前掲書一四二頁 タフティバイ15—23参照 | | | | |
-
- | | |
|-----|---|
| (2) | 3 |
| (3) | 1 |
| (4) | 5 |
| (5) | 5 |
| (6) | 9 |